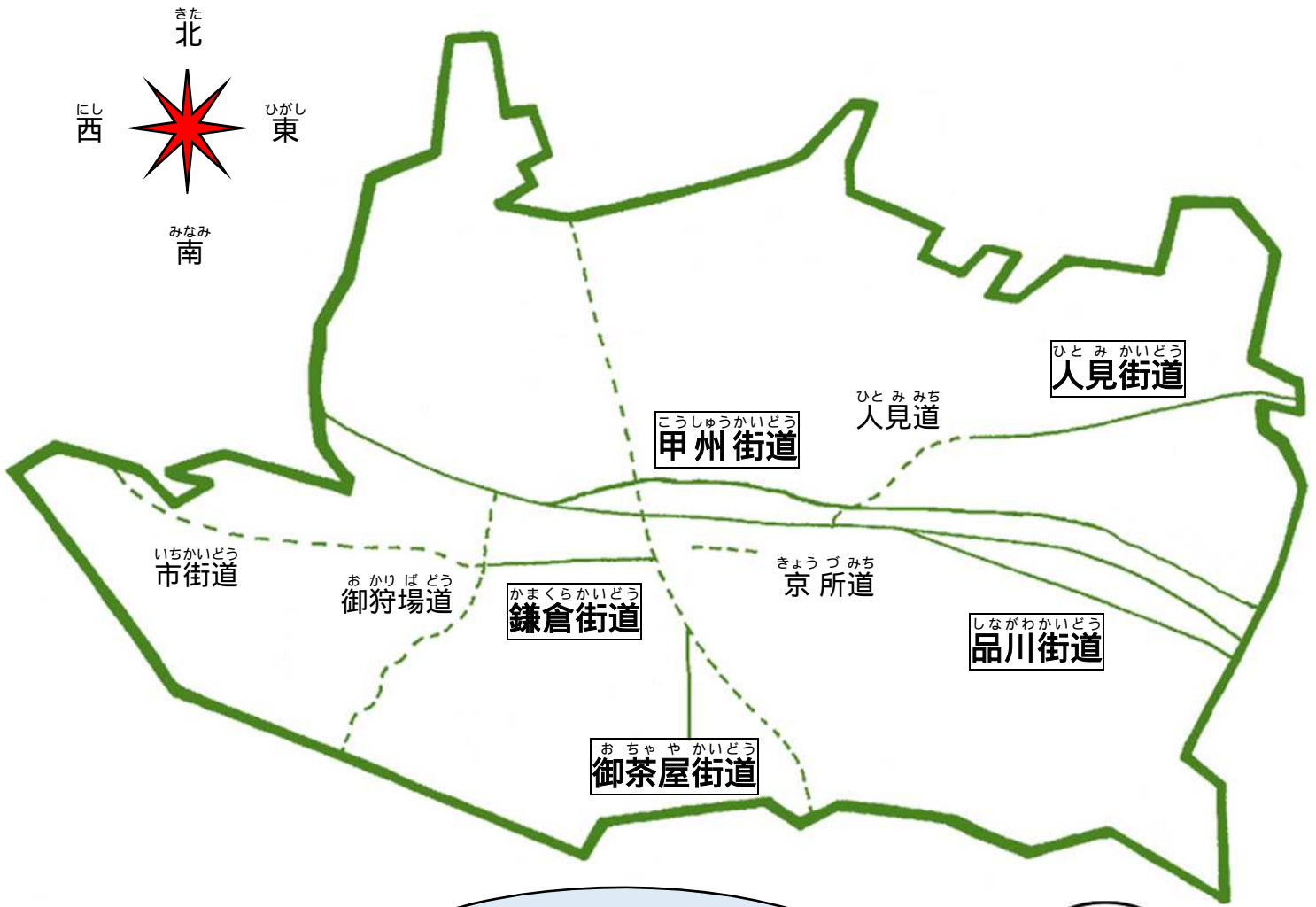
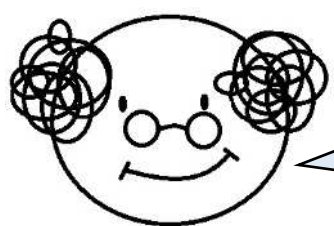
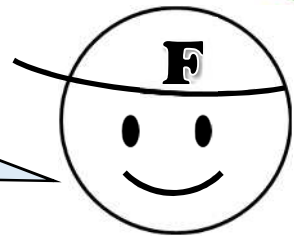


かいどう 府中の街道



府中にある道もいろいろな
名前なまえで呼ばれているね。



今回は府中の道の中でも街道につ
いて、いっしょに調べてみよう。



とお かいどう
府中を通る街道

かいどう なまえ みち
府中には街道の名前がつく道がいくつかあります。

かいどう ちゅうおう ちほう まち まち じゅうよう みち
街道は中央と地方、町と町をつなげる重要な道の

ことです。また、その時々^{ときどき}の政治^{せいじ}の中心^{ちゅうしん}があった場^ば

しょ かんけい きょうと かまくら せい
所と関係があるといわれています。京都や鎌倉に政

じ ちゅうしん ころ とうさんどう むさしみち かまくら
治の中心があった頃、「東山道武蔵路」*1や「鎌倉

かいどう しない しゅうよう みち りょう
街道」が市内の主要な道として利用されていまし

た。その後、政治の中心が江戸（東京）に移ると

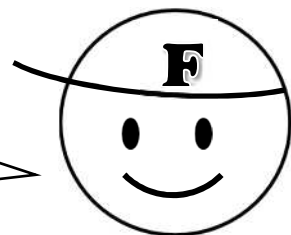
ご かいどう こうしゅうかいどう しない しゅうよう みち
五街道の1つである「甲州街道」が市内の主要な道

いまま おお ひと りょう
になり、今でも多くの人に利用されています。

* 1は「こども府中は

かせ^{だいごう}第5号」のP.6

み
を見てね。



こうしゅうかいどう 甲州街道

とくがわいえやす せきが はら たたか あと けいちょう いろいろ かいどう
徳川家康は関ヶ原の戦いの後、慶長6(1601)年から色々な街道を

せいび なか にほんばし しゅっぱつてん
整備しました。その中に日本橋を出発点とし

えど にほんかくち ひろ しゅよう
て、江戸から日本各地に広がっていった主要な

かいどう 5 本あります。これらは「五街道」*2と

よ
呼ばれ、そのうちの1つが「甲州街道」です。

*2 五街道

こうしゅうかいどう ほか
甲州街道の他には
とうかいどう なかせんどう にっ
東海道、中山道、日
こうかいどう おうしゅうかいどう
光街道、奥州街道が
あります。

こうしゅうかいどう にほんばし しゅっぱつ しんじゅく ちょうふ とお しない はい
「甲州街道」は日本橋を出発し、新宿、調布を通って、府中市内に入

しない とうざい とお はちおうじ こうふ やまなしけん とお しもすわ なが
ります。市内を東西に通って、八王子、甲府(山梨県)を通って下諏訪(長

のけん なかせんどう ごうりゅう こうしゅうかいどう みちすじ
野県)で「中山道」に合流します。ここまでが「甲州街道」の道筋です。

しない こうしゅう なまえ よ かいどう
市内には「甲州」の名前で呼ばれている街道が3本あります。1本は

けいおうせん きたがわ とうざい とお なみき よこぎ かいどう
京王線の北側を東西に通っていて、ケヤキ並木を横切っている街道です。

みち げんざい こうしゅうかいどう こくどう ごう しんこうしゅうかいどう
この道が現在の「甲州街道」であり、国道20号または「新甲州街道」と

よ しない みちすじ しょうわ ほんしゅく ひがし
も呼ばれています。市内の道筋は昭和31(1956)年に本宿～東府中

かん しょうわ ひがし ちょうふかん かいどう みち
間が、昭和36(1961)年に東府中～調布間が開通しました。この道は

どうろ こんざつ さ つく
道路の混雑を避けるために作られました。

しんこうしゅうかいどう みなみがわ けいおうせん みなみがわ とうざい とお
もう1本は「新甲州街道」よりやや南側、京王線の南側を東西に通

かいどう かいどう しらいとだい ちょうめ しない はい
っている街道です。この街道は白糸台6丁目から府中市内に入ります。

その後、大國魂神社の大鳥居前を通過し、本

宿町交差点で「新甲州街道」に合流しま

す。この街道は江戸時代に整備され、「新甲

州街道」が開通するまで「甲州街道」と呼

ばれていましたが、現在は「旧甲州街道」

と呼ばれています。江戸時代、参勤交代^{*3}の

際に「甲州街道」も利用されていましたが、

他の街道に比べるとあまり使われていなか

ったようです。

そして、もう1本が「旧甲州街道」の南

側を通っている「甲州古街道」です。市内に

ある「甲州」の名前が付く街道の中では一番

古い街道です。「品川街道」から「京所道」、

大國魂神社の随神門前を通り、善明寺と高

安寺の南を抜け、「御獵場道」を通過して府中

を通過していたといわれています。

江戸時代、「甲州街道」の出发点である日

本橋からの距離の目安にするため、街道沿い

に一里塚^{*6}が建てられ、市内には2つの一里

^{*3} 参勤交代

江戸時代、大名^{*4}を1年交代で領地と江戸を行き来させて、妻子を江戸に住まわせた制度。徳川家康のころから始まっていましたが、3代将軍家光の頃に制度として定まりました。

^{*4} 大名

江戸時代、石高^{*5}が一万石以上の領地をもっていた武士。

^{*5} 石高

土地の生産力をお米の収穫量であらわしたもので、一石は1年間で大人が食べるお米の量。

^{*6} 一里塚

一里(約4キロメートル)ごとに街道の脇に作られた塚。江戸時代になると、日本橋を出发点とした一里塚が全国で作られるようになりました。塚の側には榎の木などが植えられ、旅のみのりや人馬を使う時の賃金の目安になっていたそうです。

塚がありました。1 つは旧常久村内、現在の清水が丘3丁目、「品川街道」

沿いにありました。もう1 つは日新町1丁目

にあるNEC府中事業場内、「御猟場道」の

近くにありました。現在は一里塚跡の石碑が建

っていますが、どちらの一里塚も江戸時代の

「甲州街道」である「旧甲州街道」よりも

南側に建てられていて、道筋がむかしよりも

移動していることを示していると言えるでし

ょう。



一里塚跡の石碑
(清水が丘3丁目)

かまくらかいどう 鎌倉街道

鎌倉街道は中世の時代は「鎌倉道」と呼ばれ、江戸時代になってから

「鎌倉街道」「鎌倉古道」「鎌倉古街道」などと呼ばれるようになりました。

また、関東やその周辺諸国の武士たちが鎌倉へ向かう時に通った道であ

り、諸国からの物資を運び入れるための道でもありました。

鎌倉街道は、すでにあつた道をつないでいくことで「鎌倉に至る道」と

されていたため、^{しゅよう みち ほか えだみち かんどう おお とくちょう}主要な道の他にも枝道や間道も多くあることが特徴と
されています。そして、^{ゆうりょく ぶし あつ かまくら おうぶく つか}有力な武士たちの集まりが鎌倉への往復に使っ
たとされる道を、その地方では^{みち ち ほう かまくらかいどう よ}鎌倉街道と呼んでいることもあります。

^{かまくらかいどう だいひょうてき かみのみち なかのみち しみのみち}鎌倉街道には代表的なものが3本あり、それぞれ上道、中道、下道
と呼ばれています。この中で、^{よ なか かまくらかいどうかみのみち しなひ とお みち}鎌倉街道上道が府中市内を通っている道
であり、^{かまくら まち だ こくぶん じ とお しなの ながの けん}鎌倉から町田、府中、国分寺を通って信濃（長野県）へとつなが
っています。

^{しなひ げんざい かまくらかいどう ほんまち ちょうめこうさてん はじ にし すす}市内の現在の鎌倉街道は、本町一丁目交差点から始まって、西へ進んで
いき、^{ぶ ばいちゅうざいしよ みなみ ま すす しなひ なんぼく}分梅駐在所で南に曲がって進んでいきます。やがて市内を南北に
^{とお しん かいどう ごうりゅう たまがわ か せきどばし つづ}通っている新府中街道に合流し、多摩川に架かる関戸橋へと続いていき
ます。

^{かまくらかいどう みちすじ ぶ きん}鎌倉街道の道筋の付近には、
^{ぶ ばいが わら こせんじょう ひ ぶ ばいちょう}『分倍河原古戦場碑』(分梅町
^{ちょうめ につたよしさだこうの ぞう かた}2丁目)と『新田義貞公之像』(片
^{まち ちょうめ}町3丁目)があります。

^{ぶ ばいが わら こせんじょう ひ げん}『分倍河原古戦場碑』は、元
^{こう ぶしやう につたよし}弘3(1333)年に武将の新田義
^{さだ かまくら ぜ さい いくさ}貞が鎌倉攻めをした際に戦が
^{いったい お}この一帯で起こったことなどが



^{につたよしさだこうの ぞう}新田義貞公之像

た
ら建てられたとされています。そして、『新田義貞公之像』は、分倍河原駅
まえ
前のロータリーにあります。この像は馬に乗って剣を掲げており、その視
せん かまくら ほうがく
線は鎌倉の方角をみつめています。

しながわかいどう しながわみち 品川街道・品川道

おおくにたまじんじゃ れいたいさい まつり もち
大國魂神社の例大祭(くらやみ祭)*7に用
きよ かいすい しながわ うみ ある
いる清めの海水を、品川の海からむかしは歩
はこ
いて運んでいました。この時に往復した道が
ふる しながわみち
古くからの品川道といわれています。

れいたいさい まつり
*7 例大祭(くらやみ祭)
「こども府中はかせ だい
ごう まつり 第7
号」のくらやみ祭のところが
み
を見てね。

しながわみち もじ しながわ つう みち ひろ つか なまえ じだい ばしょ
品川道は文字どおり品川へ通じる道に広く使われた名前前で、時代や場所
によっていくつも道がありました。

せいぶ たまがわせん しらいとだいえき みなみがわ はし しながわかいどう むさしのくに こく
西武多摩川線の白糸台駅の南側を走る品川街道は、府中に武蔵国の国
ふ じだい さがみのくに こくふ むさしのくに こくふ たびびと ふたた
府がおかれた時代に、相模国の国府から武蔵国の国府にきた旅人が、再
とうかいどう みち かれ おおくにたまじんじゃすいじんもん まえ ひがし
び東海道へもどるための道でした。彼らは大國魂神社随神門の前から東
へ崖(ハケ)の上を通り、常久村の一里塚(清水が丘3丁目)を過ぎたあ
いま ちょうふし こまえし とお しながわく たちあいがわ ふ きん とうかいどう
とは、今の調布市、狛江市を通り、品川区の立会川付近で東海道にもどっ

ていました。

また、この道は別名「筏道」とも呼ばれ、これは多摩川上流から木材を組んだ筏に乗って江戸まで川を下って行った筏師たちが、ここを歩いて帰ったことからきています。『奥多摩町異聞』によれば、元禄(1688~1703年)の頃には、江戸上野東叡山寛永寺の修理のためにも、多摩川を下った青梅の木材が使用されました。

現在は、京王線東府中駅を出ると甲州街道の手前に「品川街道」の標識があり、調布方面に向かう道があります。府中第四小学校の角にはむかしの道しるべがあり、品川道の文字がかすかに読み取れますが、新道の開発などで、街道全体を見通すことは難しくなっています。



人見街道は、多磨霊園や浅間山の南側を東西に通る道です。むかし若松町3・4丁目の一部に人見村があり、その中心を通っていたため人見街道と名づけられました。

人見の地名の起こりは不明ですが、かつて武蔵七党*⁸の猪俣党人見氏が

この地域に住んでいたからとも、浅間山から

遠くを見たり遠くからも見えることで別名

を「人見山」と呼ばれていたからともいわれています。

浅間山の周りは、中世には「人見原」、江

戸時代には「小人見」などの地名で呼ばれて

いました。人見街道と浅間山の間には「人見

稲荷神社」があります。

府中に武蔵国の国府がおかれた時代には、人見街道は大宮(埼玉県の大

宮とも東京都杉並区の大宮ともいわれている)へ続く「大宮街道」、下総

国(千葉県)に向かう「下総街道」とも呼ばれていました。江戸時代には

甲州街道よりも江戸への近道とされ、「甲州裏道」や「府中裏道」とも呼

ばれました。また、江戸へ荷物を運ぶ道としてよく使われていたことから

「江戸街道」とも呼ばれていました。

大國魂神社の例大祭(くらやみ祭)の時に、江戸時代の中頃までは、三

之宮である氷川神社(埼玉県さいたま市)の神輿が人見街道を通り人見村

まで来て、ここから祭に参加したといわれています。

むかしは、人見街道から大國魂神社のある旧甲州街道まで続いていた

「こみとめ道」と「人見道」が、昭和15(1940)年にできた陸軍燃料

むさしちとう
* 8 武蔵七党

へいあんじだい すえごる むろ
平安時代の末頃から室
まちじだい はじ ごろ むさしのくに
町時代の初め頃、武蔵国
ちゅうしん かつやく ぶし
を中心に活躍した武士
だん のよ むらやま よこやま いの
団。野与・村山・横山・猪
またこだま たん たんじ にし
侯・児玉・丹(丹治)・西の
しちとう ちがせつ
七党といわれるが、違う説
ひとみし いのまたどう
もある。人見氏は猪俣党
ぞく
に属している。

しょう げんざい じえいたいき ち なか とお ひと み かい
 廠（現在の自衛隊基地）の中を通ることとなったため、もともとの人見街
 どう ぜんたい
 道の全体をたどることはできなくなっています。

げんざい わかまつちょう ちょう
 現在は、若松町 4 丁

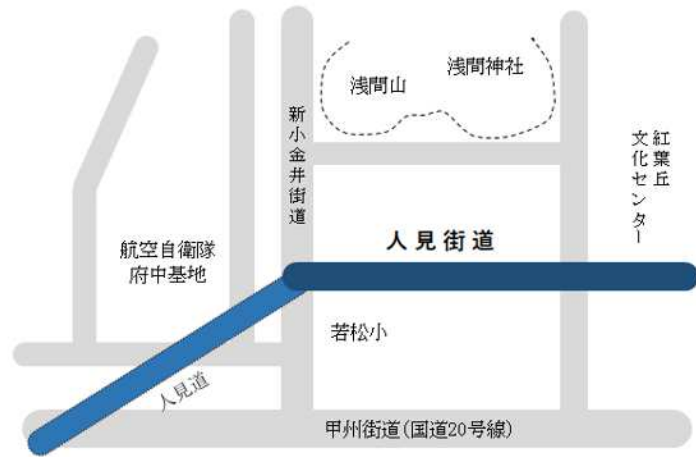
め しん こがねい かいどう こう
 目の新小金井街道との交

さてん ひがし む
 差点から 東 へ向かい、

ちょうふし みたかし とお
 調布市、三鷹市を通り、

すぎなみく い かしらどお
 杉並区の井の頭通りま

どが ひと み かいどう
 だが人見街道となってい
 ます。



ひと み かいどう みちすじ
 人見街道の道筋

お ちや や かいどう 御茶屋街道

とくがわいえやす たかがり とおき しゆくはくじょ きゅうけいじょ ごてん つか
 徳川家康は鷹狩などをする時、宿泊所や休憩所として府中御殿を使っ
 ていました。そこで茶の湯に使用する水を多摩川から運ぶために作られた
 ちや ゆ しよう みず たまがわ はこ つく
 道が「御茶屋街道」です。むかしは地名としても使われていました。

ごてん げんざい ほんまちえき かいどう み は よ たかだい
 府中御殿は、現在の府中本町駅と府中街道の見晴らしの良い高台にあり
 ました。御殿の 東 側にある府中街道は、むかしから鎌倉や東北・北関東に

つう じゅうよう みち
通じる重要な道でした。

ごてん てんしょう た とくがわいえやす ひでただ とよとみ
府中御殿は、天正18(1590)年に建てられ、徳川家康や秀忠、豊臣

ひでよし おとず げん な とくがわいえやす いたい く のうざん しずおか
秀吉も訪れました。元和3(1617)年に徳川家康の遺体を久能山(静岡

けん にっこう とちぎけん うつ とき つか しょうほう
県)から日光(栃木県)へ移す時にも使われました。正保3(1646)年

ほんまち おおかし ごてん や ご ごてん
の府中本町の大火事で、府中御殿は焼けてしまいました。その後、御殿の

あとち でんしょう のこ さいきん はくつちようさ そんな
跡地の伝承だけが残されていましたが、最近の発掘調査によってその存

ざい しょうめい げんざい くにしせき むさしこくふあとごてんちちく
在が証明されました。現在は、国史跡・武蔵国府跡御殿地地区となってい
ます。

おちゃやかいどう かいどう みじか ごてんち ひがしがわ
御茶屋街道は、街道というには短いかもしれませんが、御殿地の東側

みなみ む やざきちょう ちょうめ かわさきかいどう かいどう わ
から南へ向かい矢崎町1丁目で川崎街道(府中街道)と分かれて、サン

トリーのビール工場、卸売センターの側を通り、是政6丁目あたりで

たまがわ む げんざい とお いちぶ
多摩川に向かっていました。現在はふるさと通りの一部になっています。

えどじたい ごてん
江戸時代、府中御殿のような

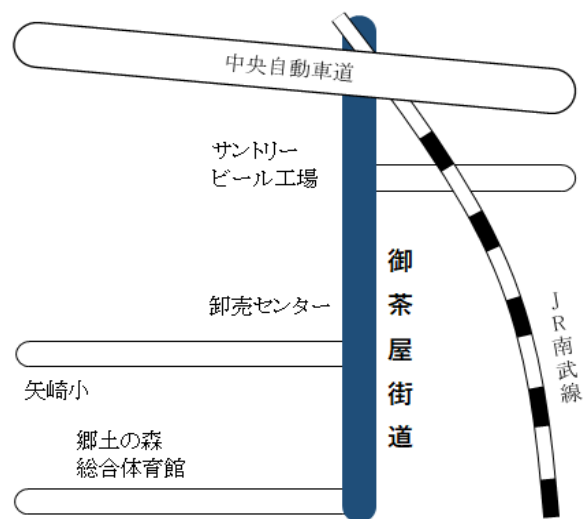
しゅくはくじょ ぜんこく たすう き
宿泊所が全国に多数あり、規

ぼ ちい ごてん おちゃや
模の小さな御殿を「御茶屋」と

よ
呼んでいたようです。ここから

かいどう ゆらい
も街道の由来があるかもしれ

ません。



おちゃやかいどう みちすじ
御茶屋街道の道筋



もっと知りたくなったら読む本のリスト

しよめい ほん なまえ 書名(本の名前)	ちよしゃ ほん か ひと 著者(本を書いた人)	しゅっぱんねん 出版年	ほん せ 本の背ラベル
あの日の府中 府中市制施行55周年記念写真集	府中市政策総務部広報課/企画・編集	2010年	F21/ア/
府中市の歴史 新版 武蔵国府のまち	府中市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財担当/編集	2006年	F21/フ/
府中の風土誌 第7版	東京都府中市役所/編	1981年	F21/フ/
八王子・日野・府中・調布・町田史跡散歩 武蔵野多摩史跡ガイド1	芥川龍男/著	1979年	F29/ア/
いしぶみ草紙 路傍の語り部たち	府中市文化スポーツ部文化振興課/編集	2010年	F29/イ/
多摩の街道 下 鎌倉街道・町田街道・五日市街道ほか	池上真由美/[他]著	1999年	F29/タ/
府中の地理ガイドブック	府中の地理ガイドブック編集委員会/ 編	1986年	F29/フ/
京王沿線ぐらり歴史散歩 全69駅網羅	東京歴史研究会/編	2011年	F291.3/00/ケ
徳川御殿@府中 府中市郷土の森博物館ブックレット19	府中市郷土の森博物館/編集	2018年	F213/10/ト
グラフ府中[第3号](1970年度版)	府中市企画調整部広報課/編集	1970年	F318.5/10/グ
鎌倉街道伝説	宮田太郎/著	2001年	F682/93/ミ
東京の道事典	吉田之彦・渡辺晋ほか/編	2009年	F685/00/ト

さがしている本が見つからない時は、図書館の人に聞いてみましょう。



「府中の街道」こども府中はかせ No.9
2019年3月発行
府中市立図書館 編集・発行
<https://library.city.fuchu.tokyo.jp/>

